

俺は最強の助っ人だッ！

高梁市立高梁中学校

二年生 吉井陽貴

「暑いけど、やっとかんともって大変なことになるからなあ。朝早く出かけるわ。」

「そうじゃなあ。気をつけんといけんよ。」
夏休みに入ったばかりのある夜、両親の会話が聞こえた。どうやら父が独りで草刈りをしに行くようだ。

「俺も父ちゃんと行くよ。」
自分から率先して父にそう言ったのには理由がある。実は、五月に父と二人で草刈りに行ったとき、父が立ちくらみで倒れてしまったのだ。近くにいた僕は、すぐ父に水を飲ませたりして、介抱することができた。そのときは大したことにならなかったが、この焼けつくような暑さの中、また何かあったらと

心配になった。テレビでも、毎日「畑で作業中に熱中症で搬送」のニュース。「独りではさせられない。僕が助けないと。」と使命感のようなものがわいてきたのだ。

「それじゃ、明日朝五時に出発しよう。」
予定が決まった。今までは、

「暑いから家にいなさい。」
と言われることが多かったから、認められたような気がして、何だかうれしくなった。

草刈りをするのは、自宅から車で二十分ほど走った場所にある畑とお墓だ。祖父から引き継ぎ、もう二十年近く父が管理をしているらしい。僕は、あそこに草がたくさん生えているのをあまり見たことがないし、すぐ終わるだろうと気楽に思っていたが、現実をあまくなかった。

「ファッ。」
思わず変な声が出た。目の前一面がふさふさしているのだ。大きいものから小さいの、色の濃いものから薄いのまで、草、草、草。草の強じんな生命力を目の当たりにした瞬間だった。

「ああ、たくさんあるなあ。」
父の驚きと落たんの声は僕をおじけづかせた。昼までかかった

らどうしようかと、思っているうちに、父が刈払機のエンジンをかけた。

「やらなきゃ終わらない。俺もやらなきゃ、何のために来たんだってなってしまう。」

そう声に出して、僕も覚悟を決めた。

僕の担当は、お墓の草抜きだ。目の前の草をつかみ、抜いていく。雨が全然降っていないから、地面が硬い。草も頑固で簡単に抜けてはくれず、途中でぶちっと切れてしまう。

「大丈夫。できる。すぐ終わる。」

そう自分に言い聞かせて、どんどん草を抜いていく。しかし、草が全然無くならない。周りを見ると、細かい草が密集している所を見つけてしまった。絶対に時間がかかるやつだ。

「これ、本当に終わるのかよ。」

でも、気落ちしてはいけない。ペースダウンはもっと自分を苦しめることになる。太陽が昇り、気温もどんどん上がってくる。この状況、どうすればいいんだ。いろいろ考えた。

「そうだ。好きな歌を脳内再生して、モチベーションアップだ。」

早速、僕が好きな特撮ヒーローの歌を頭の中で流してみると、

どんどん作業が進む。

「俺は草と戦うヒーローだ。」

勢いづいた僕は、のりのりで大きな草を一気に片付けることに成功した。

「どんなもんじゃ。」

しかし、本番はここからだ。まだまだ大量の細かい草の集団が残っている。途中、父と、水分補給と休憩をはさみながら、この集団に戦いを挑む。

「もう少した。すぐ終わらせてやる。」

だが、こいつはなかなかの曲者で、とにかく草が細く小さく、つかみにくい。根までうまく抜けない。抜いても抜いても減らない。逆に草が増えてるんじゃないかとすら思えてくる。徐々に僕のやる気がダウンし、心が折れそうになってきたそのとき、様子を見に来た父の言葉で気力が戻った。

「だいぶきれいなったなあ。草を無くしてあげると、仏様が喜んでくれるからね。」

僕は、はっとした。

「そうだ、お墓をきれいにしてあげることは仏様のためなんだ。仏様が喜んでくれるなら、こんな草抜き大したことない。」

「よし、残りも頑張るぞ。」

一気にやる気アップで再び草の集団に挑む。だが、すんなり草抜き終了とはならなかった。またもや、僕を邪魔する奴が現われたのだ。

「小さい虫がたくさんいて気が散る。」

刈払機での作業が終わった父と二人で草を抜いていると、寢床にしている草を抜かれたことに腹を立てたのだろうか。どこからともなく大量の名前も知らない小さな虫に、僕らは取り囲まれた。顔の周りを飛んで、集中できない。

「見てるだけで、体がかゆくなるなあ。」

父も顔をしかめている。でも、やっぱり仏様は見てくれていた。救世主の登場だ。小さな虫をねらってか、トンボの大群が現われて、あっという間に小さな虫をけ散らしてくれたのだ。僕らの手も再び動き始め、そしてついにこの時がおとずれた。

「よし、終わった。」

草との戦いによくやく勝利したのだ。

「陽貴が来てくれたから、暑くなる前に終わって助かったよ。ありがとう。」

父からお礼を言われてうれしくなった。早起きして頑張ったか

いがあったと思う。

「仏様、草は無くなりましたよ。」

お墓の前でそう報告して、父の車に乗り込んだ。時計は八時三十分だった。三時間の戦いで、ふさふさした畑は平らになり、緑一色だったお墓は、砂の色になった。今日は父が倒れることもなかったし、すがすがしい気持ちを感じた。

帰りの道中、僕は眠りそうになりながら、心の中で思った。また、父が独りで何か作業をしようとしたら、進んで声をかけて手伝おう。誰かが喜んでくれるのなら、自分はいつでも、疲れてもやってみせる！